

三遊亭円朝『(角) 欧州小説 黄薔薇』論

—〈通俗〉論のための一試考—

小松史生子

0. はじめに

三遊亭円朝の翻案小説『(角) 欧州小説 黄薔薇』は、明治20年4月に金泉堂より発兌されて以来、明治21～40年に渡って再版、翻刻がなされてきた。また、明治29年～44年にかけて芝居でも上演され続けている。こうしたデータからは、今日円朝の作品としてそれほど知名度を持たないこの翻案小説が、刊行当時はかなり持続して人気のある作品であったことがわかる。この作品の何がそれほど享受層の人気を得たのだろうか。

『(角) 欧州小説 黄薔薇』の物語を起承転結の構成で見た場合、転部の発端になるのは、元老院議長道の邊清美^{きよみ}の妾であるお吉が、前途有望な若い官員江沼実^{みのる}への横恋慕と嫉妬から、彼の妻お万を、お万に岡惚れしている実の朋輩美濃部龍作に犯させるという第三十回の展開であり、ここに於いて入り組んだ三角関係の相関構図が形成される。しかし、入り組んでいるとは言っても、その構図は江戸近世の読本や合巻、黙阿弥劇に代表される歌舞伎の筋立てなどで巡る因果の人物関係に慣れていた当時の享受層にとっては、寧ろ常套の型であった。前述したように、『黄薔薇』は、現に明治29年7月東京浅草座を皮切りに舞台化がなされている。

また、翻案小説であると唱いながら、『毒婦嬖李伝』として、先行する『鳥追阿松海上新話』や『夜嵐阿衣花廻仇夢』、『高橋阿伝夜双譚』といった一連の毒婦実録物にテキストを単純に系列化させてしまうかのような『黄薔薇』の体裁は、カルチュラル・スタディーズの側面からは様々な論点が見出されるに違いないが、それとておそらく評価の新機軸が打ち出され得るようなものではなく、明治20年代という時代相を定説通りに浮上させる程度の結論しか導き出せないのではないかという予想がつく。

以上のような見通しを覚悟しつつ、この論では、『黄薔薇』という作品自体の読み込みから、言語態研究の試みとして、常套或いは通俗と言える型を踏襲するテキストが提示し得ると考えられる今日的な文学の問題点に、出来うる限り迫ってみることにする。

1. クロロホルム

美濃部を犯行にそそのかす際、お吉が授けた索は次のようなものであった。

「此間他の人が持つて来て呉れたが何とか云ったつけコロールホルムとか云ふ薬で之をハンケチーに浸志て持つて居て向ふの女を口説て声を立た時之で鼻を押へれば夫れを嗅ぎ込むと好心持になつて三十分計り正体なしに眠るとねへ夫れを辱か志める悪党があると云が不思議な効能のある薬だねへ」

(第三十回)

何故ここに「コロールホルム」という具体的な薬品名が登場しているのか。『黄薔薇』のプロットが大きく転回する要因に添えられていることから、その薬品名表記の果たす機能についての分析は必要であると思われる。まずは右の引用文に見えるコロールホルム＝クロロホルムに着目し、明治二十年代前後の言語空間に於ける『黄薔薇』の占める位置を確認しておこう。

クロロホルムは、西洋医学・薬学輸入の未だ黎明期にあった明治初期から大正にあっては、主に外科手術を行う際の全身麻酔として、エーテルと並ぶ最もポピュラーな薬品の一つであった。メタン CH_4 の三個の水素をクロルで置換したと考えられる化合物で、無色透明揮発性且つ不燃性の液体。特有の香氣と甘味を有する。日光と空気的作用によって、塩素、塩酸、ホスゲン等に分解され、極めて危険であるから、褐色ビンに入れて密栓し、暗所に蓄えねばならない。麻酔用としては特に精製した麻酔用クロロホルム（局方品）を使用するが副作用があるとされる。（以上、平凡社『世界大百科事典』）

このクロロホルムは、明治になって日本に輸入された西洋の新薬である。

1847年、イギリスのJames Young Simpsonによって発見され、それまで使用されていたエーテル麻酔に代わって全世界に普及した。日本への紹介は、最も早いもので1860年／万延元年シーボルトの弟子二宮敬作がオランダの医書からその製造法を抄訳したものであるとされる。翌1861年／文久元年には伊藤玄朴が吉原の幫間桜川善孝の子山二郎の脱疽手術にクロロホルム麻酔を使用した。クロロホルムが西洋で発見されてから日本で紹介される間の時差は、13年である。が、紹介され、実際にクロロホルム麻酔下の手術が行われて以後も、日本ではしばらくエーテル麻酔との併用が見られたし、クロロホルムはまだまだ知名度の低い新薬だった。

そのクロロホルムの知名度を一挙に上げ、医学界のみならず一般庶民の層にまで浸透させるのに効あったのが、おそらく1867年／慶應3年の人気歌舞伎俳優沢村田之助の脱疽手術であると考えられる。米国長老派教会の日本派遣宣教師であったアメリカ人医師J.C.Hepburnは、〈ヘボン〉という通称でこの後有名にな

るが、そのきっかけは、この沢村田之助というスターの右足切断手術をクロロホルム麻酔下で施行したことにあった。手術の様子は新聞錦絵にもなり、外科医ヘボンの名は田之助との関連で仮名垣魯文『高橋阿伝夜刃譚』（明治12）や岡本起泉『沢村田之助曙草紙』（明治13）といった合巻にも登場して、巷の読者層に夙に知られていった。（図1）

また、ヘボンによる田之助の脱疽手術の翌年、1868年／慶應4年5月22日付けの江湖新聞の記事には、5月19日付け横浜出版ヘラルド紙の抄訳が掲載され、上野彰義隊と官軍との戦いに於ける負傷者を外国人医師がクロロホルムで治療した旨が報告されており、麻酔薬としてのクロロホルムの知名度はこの時点でかなり高くなったと言えよう。

日本の近代の幕開けとなった戊辰戦争を、医療史の面から検討した小池猪一は、『図説日本の“医”の歴史（上） 通史』（大空社 平成5・10）に於いて、

...ポンペに学んだ最新の医療技術を身につけた松本良順と関閑齋とが両軍にわかれて戦い、官軍側にイギリス人医師ウイリスが加わり、数少ない洋方医の医療活動を補助するために多数の漢方医が動員され、かつて経験したことのない銃創の治療に当たった。それはポンペ流（蘭）対ウイリス流（英）の対決であり、また、それとは別に洋方対漢方が対決する壮大な医療戦争でもあった。

と要約している。この対決は、一応前者がウイリス流、後者が洋方の勝利となって終結する。江湖新聞のヘラルド紙抄訳によれば、クロロホルムを治療に使用したのはウイリス側医師団である。同じ事件を扱って、こちらは慶應4年6月の中外新聞の記事を引きながら、石井研堂『明治事物起源 第十三編・病医部』は、「田之助の外科手術に後ること十ヶ月のことなり」（「外科手術の麻薬に驚く」）としているが、彼は同書で田之助を「邦人コロロホルム（麻薬）を嗅ぎて外科手術を受けし始め」（「義足の始め」）と位置づけており、それだけ当時田之助がクロロホルム麻酔薬の知名度に影響を及ぼしたことが推測されよう。

徳川幕府が崩壊し、開国によって明治政府が欧米列強と外交を結ぶと、西洋から新薬が陸続と輸入されてきた。『薬業五十年史』（臨床月報社 昭和2・12）には、クロロホルムは明治10年頃の薬品輸入の内訳では、アトロピン、ブロームカリウム、泡水クロラル等と同様の新薬として、「その用途もまだはつきりとはして居らず、輸入も躊躇する有様であったと云ふ」と記載されている。輸入価格については調べがつかなかったが、同じく『薬業五十年史』には、明治18年頃からクロロホルムに代わる外科手術用麻酔薬として注目されだしたコカインにつ

いて、「新薬中の新薬で、明治十一年にラスベ商会の手で、病院用の見本としてほんの僅か輸入されたが、この価格驚くなかれ一オンス千二百円であつたと云ふ。……こんな高い薬は古今を通じて一寸類が無かるう」と言及されている。明治18年6月3日の東京日々新聞には、コカイン輸入奨励記事がクロロホルムの危険な副作用を引き合いに出して次のように書かれた。

…世人も知るごとく是迄切断の大手術を行ふにコロ、ホルムを用ゐ、全体の感覚は更なり一時精神をも失はしめて手術を施し来たりしが、コロ、ホルムの如き劇薬は一朝之を誤用すれば忽ち生命を失ふに至るの恐れあば、大医が数名立会の上ならねば用意に用ゐるを得ず、然るにこのコカインは切断すべき一部局を麻痺せしむるのみにて為めに精神を失はしめず、又た苦痛を感じしめざるの奇効あれば、後来普く世上に採用せらるゝに至るべし、左れども薬品は非常に高価にて、此程輸入し来るは僅かに一オンス（我八匁余）にて六百四十弗なれば、容易に用ゐる事をなし得ざるべし

このように輸入新薬が高価であつたとすれば、『黄薔薇』のお吉が何げに美濃部にクロロホルムを手渡す行為からは、元老院議長道の邊清美の外妾として、「栄曜^{くわし}栄華を志て」「二万円位の生計を志て居ります」とされるお吉の経済状況が暗示されていると解釈することができる。

しかし、輸入新薬が高価であればあるほど、贋物がまかり通り易くなるのも事実で、特に明治初期の日本は輸入洋薬の良／不良性を見極める程の知識を持ち合わせていなかったため、悪徳商人による不良洋薬が巷に氾濫する事態を招いていた。清水藤太郎は『日本薬学史』（南山堂 昭和24・7）で、明治二年刊行の石黒忠恵『贋薬鑑法』に記述された16種の薬品真偽純雑の試験法に、クロロホルム水が挙げられていると報告し、これを薬品試験専門書の嚆矢とする。明治前期発表のクロロホルムに関する学術論文には、「純粹「クロロホルム」ヲ製スル新法」（『薬学雑誌』 明治15・7）や「「クロロホルム」及び「プロオムホルム」速製法」（同 明治16・4）等、クロロホルムの製造についての報告が見られ、輸入に依存するだけでなく自給しようとする方向があつたことを示している。してみれば、不良性の贋物も含めて、クロロホルムは存外人々の身近に流布していたのかもしれない。

加えてより重要なことは、「薬局方」の制定である。長崎医学校の薬学者A.J.Geertsの提言により、政府は明治七年司薬所を東京に開設したが、薬品の質を均一化するには全国统一の薬品規格が早急に必要とされた。こうして明治13年

の中央委員会発足から6年後、明治19年6月25日、「日本薬局方」が公布されたのである。この「日本薬局方」にクロロホルムの名も挙げられており、〈第一表 薬局ニ於テ常ニ貯蔵スルヲ要スル薬品〉及び〈第三表 本表ノ薬品ハ劇薬ニ属ス他ノ薬品ト區別シ注意シテ貯フヘシ〉の中に、「囁嚙仿謨」という表記で記載されている。薬局の常備薬であったことと劇薬として扱われていたことが、矛盾するようでありながら当時一般に認識されていたのだとすれば、毒婦お吉の扱う麻醉薬としてクロロホルムは確かに似つかわしい。

「日本薬局方」が公布された翌年、明治20年刊行の『黄薔薇』に於けるクロロホルムというモチーフには、以上のような日本薬学の近代化への過度期の時代相が透けて見えており、西洋移入の一環として在った〈翻案小説〉の面目躍如といった趣がある。即ち、西洋移入の新薬の名をモチーフに使用することによって、テクストにバタ臭さといった味わいが生まれるわけだが、この決して洗練された西洋同化を意味しないバタ臭さというものについて、より深く検討を施す必要がある。

2. 麻薬／魔薬、そして薔薇

明治期の翻訳・翻案小説と言えば、政治小説と探偵小説とがその大半を占めていたが、明治20年前後の探偵小説には、翻案、創作に関わらず近代薬学知識に触発された感のある作品がある。例えば顕著な例では、幸田露伴の『あやしやな』（明治22）には、甘汞+希塩酸れもなあと（希塩酸ソーダ）＝昇汞という薬品知識がトリックに用いられている。

またその一方の政治小説では、ちょうど明治20年前半に見られる幾多の作品中に、麻醉薬或いは毒薬としてモルヒネがよく登場している。『黄薔薇』と同年に刊行された末廣鉄腸の翻案小説『花間鶯』（明治20）では、「私しの吞ませた「モルヒネ」は随分多量でありますから、明日中は受け合ふて正気になることは御座いますまい」というセリフが見られるし、矢野龍溪『浮城物語』（明治23）の第二十九回の章題は「モルヒネ剤」であり、「一瓶麻薬。」と注が附されている。モルヒネ情死なる言葉も散見する。或いはこの当時、麻醉薬としてはクロロホルムよりもモルヒネの方がより一般的だったかもしれない。というのも、当時の薬品の輸入品表（註1）では、クロロホルムの名は見受けられない代わりに、モルヒネはキニーネやコカインと共に明記されているからである。

そういった流れの中で、『黄薔薇』のように麻醉薬をモチーフとして扱った明治20年前後の前記以外の小説を見ていくと、明治15年6～11月にかけて自由新聞に連載された桜田百衛の翻案小説『西の洋血潮の暴風』は、「一ト塊の薬」を

（註1）『日本貿易精覧』（創立八十周年記念復刻 東洋経済新報社 昭和50・5）より「Ⅵ 薬材、化学薬、製薬及爆発薬」

コーヒーに投入して男が思いを遂げるという『黄薔薇』と同趣向の話であり、円朝の『塩原多助一代記』(明治18)に「麻痺薬」^{しびれぐすり}、千原伊之吉『(角)摘陰発微奇獄』(明治21)の第十二章「麻醉薬」、笠峰居士『幻影』(明治21)に「麻醉薬」、黒岩涙香『探偵』(『涙香集』所収 明治23)には「濡りたる海綿を松子が鼻の当りにあてたるが松子は其匂ひを引込むと覚えし間に前後も知らず眠りたり」とある。続けて、菊亭笑庸『(角)探偵小説 鬼美人』(明治26)には「麻醉剤を嗅せ」「一旦催眠術か麻醉剤で知覚を失わして」といった一節があり、春陽堂が明治26年に出した「探偵小説叢書」の第五集『やれ手紙』には「カス、カス、ハッシと呼ぶ死神の霊薬／無味にて服用後数時間を経れば全く神経の知覚を失う」と書かれ、やなぎ生『意外の秘密』(明治26)には「少量の魔睡薬を葡萄酒に混じて与へ」とある。また、泉鏡花の『外科室』(明治28)には「何も麻醉薬^{ねむりぐすり}を嗅いだからつて」というセリフが外科手術の場面に施され、田澤稲舟『白薔薇』(明治28)は、女を眠らせる薬としてはっきり「外科医者が手術を施す時、患者に用ゐる恐ろしき囁囉仿謨」と文中に紹介している。

『やれ手紙』のカス、カス、ハッシというのはおそらくハシッシュではないかと思われ、また田澤稲舟『白薔薇』は、その題名からも筋立てからも『黄薔薇』との関連が考察される作品である(註2)。これにモルヒネとはっきり明記された前出作品を除くと、気付かされるのは、麻醉薬が魔睡薬であるとか魔薬、或いは死神の霊薬といった殊更な表記を施されている点である。つまり、近代薬学知識に裏付けされた目新しい薬品名表記と並行して、得体の知れない怪しげな雰囲気醸し出すレトリックとしての伝統的な薬の表記がなされていたというわけで、即ち単独テキストの背後に控えるこの複数テキスト上に見られる二元的な混沌^{カオス}の言語空間の存在こそが、回帰する形で単独テキスト——本論に於いては『黄薔薇』——のバタ臭さという味わいの正体なのである。もちろん翻案小説の場合、原典に薬品名が明記されていてそれを踏襲しただけにすぎないテキストもあろうし、特に『黄薔薇』の場合は原典が確定されていない(註3)故にクロロホルムという表記が何に由来してテキスト上に現れたのかは断定できない。しかし、『黄薔薇』に於けるバタ臭さの検証には、クロロホルムと関連してその題名自体にも目を向ける必要があり、その考察からは、単にフランスの原典に依拠した従属的テキストとは言えない、日本の明治20年代という自立した言語空間を生きるテキストとしての面が浮上してくるのである。

『黄薔薇』という題名は、もちろん原作から引き継いだものであると考えるのが至当であろうが、殊クロロホルムに着目すると、クロロホルム特有の甘味(或いは香氣)と薔薇の香とが期せずしてテキスト上で相響き合っている可能性が考え

(註2) 初出は「文芸倶楽部」(明治28・12)の関秀小説特集。原題は「しろばら」。なお、延広真治「落語と近世音曲 一三遊亭円朝「月謡荻江一節」一」(『国文学 解釈と鑑賞』平成元・8)に、田澤稲舟が『月謡荻江一節』を愛読していたという指摘がある。もしそうだとすれば、彼女が『黄薔薇』をも読んでいた可能性は高い。

(註3) 原典に関する研究については、延広真治「三遊亭円朝のこと その翻案物の原典探索」(東京大学「教養学部報」昭和56・6・10)、及び「研究ノート 黄薔薇のルーツは」(東京朝日新聞・夕刊 昭和58・3・5)に詳しい。

られ得る。確かに、明治前期に於いては、クロロホルムの甘味に殊更言及した記載は見出せない（臭気という表現はなされている）が、明治後期になると、例えば北原白秋の『邪宗門』（明治41）に謳われるように、クロロホルムはセクシュアルな陶醉の甘美さのモチーフとして、西洋風庭園の詩と共に描かれるようになってくる。

赤き花の魔睡 北原白秋（『邪宗門』より）

日は真昼、ものあたたかに^{エエテル}光素の
波動は甘く、また、緩く、戸に照りかへす、
その濁る硝子のなかに音もなく、
囁囁仿謨の香ぞ滴る…… 毒の謔言……

遠く聴く、電車のきしり……
…… 棄てられし水薬のゆめ……

やはらかき猫の^{にこげ}柔毛と、^{あなうら}蹠の
ふくらのしろみ悩ましく過ぎゆく時よ、
窓の下、生の痛苦に只赤く、戦ぎえたたぬ草の花
亜鉛の管の
濕りたる筧のすそに…… いまし魔睡す……

明治41年11月

秋琴亭なる署名の『黄薔薇』緒言に示されているように、クロロホルムを使うお吉という毒婦の性情を、美しく棘のある薔薇で象徴する趣向がテキストの眼目であるならば、『黄薔薇』は後年のパンの会の南蛮趣味を遠く先取りしている作品ということになる。緒言には、「薄く黄ばみある花の咲く茨の一名を黄薔薇といふ」として、題の黄薔薇を和産の茨の一種と解しているが、明治期は西洋薔薇の輸入が盛んに行われた時期であり、それまで中国産コウシンバラやモッコウバラに親しんでいた日本人にとって、花卉が鋭く香も強い西洋薔薇はクロロホルムと同様、翻案小説の面目を支える一趣向であったことは確実である。張競の「恋の心象としての薔薇」（『近代日本の翻訳文化』中央公論社 平成6・1）には次のような指摘がある。

ヨーロッパから伝わった「薔薇」は当初「ばら」と呼ばれていなかったようである。そもそも「ばら」は「うばら」から変化してきた語で、「いばら」も「のばら」もとげのある木なら全部「ばら」だからである。明治初期には「ばら」といえばまず連想されるのはおそらく「のばら」であろう。それだけに『於母影』のなかの「薔薇」は「さうび」でなければならず、「ばら」であってはならなかったのだ。

まるで読者の誤読を心配するかのように『於母影』の訳者は目次に「花薔薇」という詩の漢字表記を避け、わざと「花さうび」と仮名を使った。原詩の西欧的な雰囲気を与えようとした訳者の苦心は用語の推敲にもにじみでている。

『黄薔薇』のルビが「くわうしやうび」であることは、西洋薔薇を念頭に置いた所以であると推測でき、故に「茨」と解した秋琴亭の緒言は肝心な所でテキストの読み違いを起こしていると言えよう。

詳しく調べると、薔薇の栽培が記録に現れるようになったのは江戸時代からであるが、洋種の薔薇が直接に日本に伝わったのは明治3年で、和歌山の山東一郎という人物がアメリカから苗木を買い入れたのが最初と言われ、続いて明治5～6年に開拓史が同じくアメリカから苗木を取り寄せた。明治9～36年頃まで薔薇の栽培は非常に盛んであったが、主として盆栽であった。薔薇の需要が一般化し、東京で切花用の薔薇が温室で栽培されるようになったのは、大正11年頃からと言われる。参考のために、鈴木省三『ばら花図譜』（小学館 平成7・4）から明治期に於ける薔薇に関する書物並びに品評会の列記を孫引きさせてもらう。（「」表記は品評会、『』表記は書物）

- ・「宇内薔薇花競」（明治8） ... 54品種出品。
- ・『ヘンデルソン薔薇栽培法』（明治8） ... Peter Henderson『Practical Floriculture』の抄訳。水品梅処・訳。
- ・『薔薇栽培法』（明治8） ... Samuel Panson 著。安井真八郎・訳。
- ・「各国薔薇花競」（明治10） ... 72品種出品。
- ・「薔薇花見立競」（明治12） ... 80品種以上出品。
- ・『薔薇名花集』（明治21） ... 90品種以上記載。
- ・『薔薇栽培新書』（賀集久太郎 明治35）

...「一八九〇頃には一七八種の品種と五種の実種があげられるようになった」

これで見ると、『黄薔薇』が刊行された明治20年頃には、薔薇の品種の紹介は

90以上の数に及び、人々の関心を集めていたことがわかる。実際に明治35年の『薔薇栽培新書』を読んでみると、〈日本に栽培せられたる沿革及種類〉から〈徳川時代の栽培種類〉、〈維新後の薔薇〉と詳細な品種を数多く紹介しており、またそのみに留まらず花言葉への言及も見られ(註4)、且つ本自体の装幀も各頁の本文上部にアールヌーボー風の装飾文様を施すなど洒落ており、西洋かぶれの好事家連の食指を動かすのに十分な内容となっている。

(註4) 花言葉の紹介には、既にして「黄薔薇 嫉妬」という記載が見られる。

鈴木省三は『ばら花図譜』の中で、上記の『薔薇栽培新書』に言及した後、「この頃(註：明治後期)、ペルネシアナ系のバラが輸入されるようになり、輝くような黄色バラを始め、朱黄色、朱色のバラが好まれ、金太陽、太閤、清涼殿などの名で親しまれた」と解説している。彼の解説によると、黄薔薇の成立は1900年フランスのJ.P.Ducherによる^{ソレイユ・ドール}Soleil D'Or(図2)の作出に見られ、これが現代バラの主流である^{ハイブリッド・ティ・ローズ}Hybrid Tea Roses(註5)に黄色を導入した最初の品種となつたとされ、黄はモダン・ローズの象徴とも言える意味合いを持つ花色であるらしいことがわかる。円朝の『黄薔薇』は明治20年/1887年刊行であるから、Soleil D'Orの作出より13年先行している。従って、直接的に両者を結びつけることはもちろん出来ないが、1867年のフランスに於けるHybrid Tea Roses第1号^{ラ・フランス}La France(図3)作出に始まる画期的な欧米の薔薇品種改良の波は、〈欧州小説〉と角書された翻案小説『黄薔薇』の趣向を背後から支えているのに疑いはないのではあるまいか。La Franceが天地開という和名で明治20年から25年にかけて輸入されてきたことについては、青木正久『薔薇』(昭和31)に説明されている。明治20年4月金泉堂から発兌された『黄薔薇』の表紙(図4)に色刷りされた中央の花図は、花卉が鋭く、明らかにHybrid Tea Roses(或いはTea Roses)の面影を宿している。日本に近いアジア原種の薔薇は奇しくも黄色系が主なのだが、例えば『黄薔薇』という題名が指す花を、享保年間に渡来した原種^{ローザ・バンクシアエ・ルテア}Rosa banksiae lutea(和名：キモッコウバラ)(図5)と考えては、作品の興が削がれる心地がする。寧ろ、原種と新種とが混在していた明治前期欧化趣味の一つの日本的な表れとして『黄薔薇』の題名及び表紙の花図は捉えるべきであって、そのように考えた場合、クロロホルムと同様、そのテキストの位相はバタ臭さという明治20年代言語空間の特色を以て立ち上がってくるのである。(註6)

(註5) 花は剣弁で花卉数が多く、香りはOld Rosesのダマスク香とTea Roses系の両方を持ち、四季咲きの大輪花。後述のLa Franceがその第一号で、以後この系統が現代バラの主流となる。

3. 言語のコンフリクト

しかし、檜谷昭彦によれば、『黄薔薇』は刊行当時、新派芝居の題材として迎えられた作品であり、「したがってこのときこの作品には、題名にある「欧州小説」という一種の角書など、読者や劇化上演当事者やまして観客には一顧の意味すら

(註6) 日本近代文学に登場する薔薇については、中込重明「明治文芸と薔薇」(『比較文学研究』75号・2000年)に詳しい。

ない徒し言にすぎなかった」(「子規と円朝—連続と非連続—」『文学』昭和60・11)ということである。

確かに、例えば『黄薔薇』上演の際の役割番付に付された見せ場の絵(図6)を見ると、その殆どが蚊帳の向こうの江沼実の前で妻お万が泣き伏す第四十三回の場面を描いており、『黄薔薇』のクライマックスがここに求められ、不貞の濡れ衣を着せられた妻を誠実な夫が良識で以て諭し救いながら離別するという人情話の常套の型に収斂して解されていたことがわかる。『黄薔薇』の脚本は未見だが、実際の上演で例えばクロロホルムがどれほどキーモチーフとして主張されたか疑問であり、何より番付の絵柄を見る限り、黄薔薇という題名の所以としての毒婦お吉の存在自体が稀薄な気がしてはなはだ心許ない。

檜谷昭彦は『黄薔薇』を、坪内逍遙の『小説神髓』(明治18)に拮抗する勧善懲悪の復権を唱えるテキストとして捉え、「近世と近代の断絶はじつはなかったのではないか」という疑問の提示に結びつける。

二葉亭の『浮雲』や紅葉の『金色夜叉』のヒロインたちの自己中心的な生き方と比して、お万はまるで妻敵討ちのヒロインのようだし、お吉は謀計から仕掛けた江沼への誘惑から、かえって真実の恋を知り、そのために嫉妬に狂う女となる。これも近世の毒婦像のひとつと言ってよい。クロロホルムを嗅がしてお万を陵辱させようとする美濃部への口説きにしても(これは春陽堂版全集では伏字になっている)、自分から去った男への怨念がもとなった女の妬心を描く絵双紙風な手法とも読みとれる。お吉を取り巻く政治的権力抗争の状況などは、この物語空間からは除外され、ために政界の裏面に暗躍する美女お吉の姿態というイメージはここにはないのである。

……こうして円朝は当代の読者や聴衆にもっとも享受しやすい読み変えを行ないながら、西欧の小説を移入したのである。

お吉のヒロイン像が近世的女性像の反復以外の何ものでもないというこの見解は、クロロホルムや黄薔薇というモチーフに言及しているテキストの言語態を等閑に付せば、至当性を以て確かに成立する。しかし、ここで檜谷が切り捨てたクロロホルム及び黄薔薇への言及に執着して、そこからこのテキストを、単線的な近世物語空間からの継続としてではなく、近世と近代とが錯綜し合う共時的な言語空間の発動として捉えてみてはどうだろうか。

逆説的に檜谷の言い回しを借りて言えば、勧善懲悪という近世物語空間のプロットにはめこまれた『黄薔薇』のテキストに導入されたクロロホルムや黄薔薇

といった当代流行のモチーフは、単に舞台廻しの為のみの小道具ではなく、当時の一般享受層が認知していた常套の話型に唐突に突き入れられた異質な言語空間に属する馴染みの浅い言葉なのであり、テキスト上に言語のコンフリクトを確かに引き起こしていると見るべきであろう。日本の近代化が、実質のところ日本の西洋化と同義である一面は否定し得ないところから、単なる輸入流行物名の何気ない導入であっても、その表記の背後には混沌の言語空間が広がっているのであり、バタ臭さという味わいの痕跡を見落とすわけにはやはりいかない。或いは、その在ってしかるべきバタ臭さがどのようにテキストの享受の過程で隠蔽されていたかを追求する視点が不可欠であろう。

興味深い事実がその一例として考えられる。『黄薔薇』は明治20年4月29日御届の奥付で金泉堂から初版が発兌された。ところが、同年11月2日に再版御届の奥付で改版本が金泉堂から刊行されている(図7)。初版本と改版本の表紙絵を見比べると、初版本にあったHybrid Tea Roses系の花図は改版本では消去され、代わって牡丹かいところキモッコウバラにしか見えない花と、理解に苦しむところだが何故か桜と思われる花とが配されているのである。これでは緒言にある黄薔薇とお吉の表象関係は切断されてしまい、表紙絵は全く意味をなさない図柄になってしまう。加えて、表紙で『欧州小説 黄薔薇』という題字が書かれているのは、初版本では流麗な流れを見せるリボン状の意匠なのに、改版本では角張った短冊風の意匠に変更されている。つまり改版本は、まさしく檜谷が指摘する通り欧州小説という角書の醸す西洋的趣向を意に介していないわけで、いわば近代が近世に埋没している意識構造が絵柄のモチーフによって端的に示されている一つの証左と見ることが可能なのである。新派芝居の番付が見せ場をお吉ではなくお万の愁嘆場に持ってくるのも、同様の意識構造の発露であると考えられる。そして、おそらく一般享受層もそれを是として、深く追求する見識をこの作品に対して持たなかったのだろう。

しかし、それでも尚且つお吉はくクロロホルムを扱う毒婦なのであり、『夜嵐阿衣花廼仇夢』の毒婦阿衣がモルヒネと鼠取り薬を併用し、『高橋阿伝夜刃譚』の毒婦阿伝の刑死体が医学解剖に処せられるのと相通ずる言語空間に描き出されたヒロインなのである。

問題は翻訳／翻案文体に於ける共示性の心理にあらう。モルヒネやクロロホルムコノテーションといった薬品名は、確かに西洋外科手術の最先端を示す外来語として明治初期に普及した。が、薬品名が新奇であればある程に、それを旧来のイメージ枠で解釈しようとする心理も強くなる。その時、魔薬や魔睡薬といった語感が、モルヒネやクロロホルムのコノテーションとして働き出すのである。言語の共同体幻想

による伝統的な外部への差別表記である〈魔〉が、文字通り外来品である輸入新薬に向ける眼差しと合致し得る時代だったのだ。『夜嵐阿衣花廻仇夢』が唐突にテクストに「モルヒネ麻醉薬」を薬種問屋だからという簡単な説明で登場させ、しかも後半では岩見銀山の鼠取り薬に毒薬が変更している不統一さに比べ、翻案小説である『黄薔薇』ははっきりとクロロホルムを西洋からの外来品として印象づけている。

「……西洋では若志然云ふ事があってたつた一度でも手に入れたいと云ふには此の薬を 用ひれば自由になる効能があるとねへ」
(第三十回)

フランスの原作に登場するジュリヤの翻案であるお吉の口から、「西洋では」云々というセリフが発せられるのは構造的にはおかしい。この箇所には、お吉という翻案物の毒婦の造型が必然的に孕む言語空間のコンフリクトがテクストの表面に浮上している。この言語空間のコンフリクトによる作品世界の構造の歪み、或いはぶれは、例えばラスト間際、63名もの書生がお吉の家に入り込み、お吉の謀計を糾問する場面にもっとも際だって顕れてしまう。江沼実の非業の死を嘆く63名もの政治青年達は、お吉の答弁に比べてその糾問の理論の基盤が非論理的なのである。お吉は書生達の勝手な自宅侵入を押し込み強盗かと咎めだてするが、それは尤もな指摘であり、これに答えて「失敬な事を云ふな僕等は固より賊に参ったのではない失敬極まる事を云ふ」という書生のセリフはこちらの方が無理無体である。また、お吉は自分を倉へ連れ込もうとする彼等に、「倉庫へ往ふと那処に居やうと妾の宅で妾が居るのを和郎さん方の指図は受けませんよ」と抵抗するが、これまた当然至極の論理と言う他はない。こうしたお吉の当然の権利主張に対して、書生達は彼女を腕ずくで引き立てるしか能がないのだ。江沼や美濃部との関係についても、証拠を出せと請求するお吉の立場は正当であるし、就中書生が証拠として見せた群馬新誌を鼻で笑って、「イイエ随分探訪を仕そくなつて跡から取消を為る事は幾らも有ますよ其様な事は妾は覚えは有ませんから其新聞紙へ取消を出させませうよ」と言っているのは、当時の新聞の事情に通じた見事な切り返しである。にもかかわらず、この理論的に見事な答弁をし得たお吉は、理論に詰まって感情論に訴える他術のない書生達になぶり殺されてしまう。つまり、お吉のセリフの際だった論理性はプロットに関わることなく全く空転していると言っている。お吉の論理は、近代法治国家の基本規律に触れる類のものであり、その論理が空転して義理人情的制裁に暴力で抹殺されてしまう結末は、近世と近代の言語空間のコンフリクトそのものの寓意を期せずして語っているの

ではあるまいか。『黄薔薇』というテキストは、このコンフリクトを決して消化し切っておらず、そのままに提示しているのであって、従って単線的な近世物語空間の継続としてのみ捉えるべきではないと思われる。それは或いは、物語空間と言語空間といった次元間のコンフリクト、と換言するべきものかもしれない。この換言の至当性は、『黄薔薇』をその他の円朝の西洋翻案小説と比較してみるとわかる。

円朝には『黄薔薇』の他に、『英国孝子ジョージ・スミスの伝』（明治18）、『英国女王イリザベス伝』（同上）、『松の操美人の生理』（明治19）『名人くらべ——錦の舞衣——』（明治24）、『指物師名人長二』（明治28）があるが、このうち『黄薔薇』と年代的に最も近く、且つ巷に評判を呼んだ作品として『松の操美人の生理』を見てみよう。この作品は巻頭に『黄薔薇』と同じく原書の存在をアピールする文句が附され、翻案小説の趣向を説明しているが、『黄薔薇』に於けるクロロホルムや黄薔薇のような常套の物語空間に亀裂を走らせる異質な言語の介入は見出されない。登場人物にしても、お吉が体現した翻案型故の造型の矛盾と等しい働きを以てテキストの構造の歪みを誘発するような点は全く見当たらないのである。『松の操美人の生理』は、いわばそれこそ檜谷昭彦が言うところの近世と近代の断絶を無化する境地で生み出されたテキストであり、同じ円朝によるほぼ同時期の翻案小説でありながら、『黄薔薇』とは言語態上対峙する作品と言えよう。『松の操美人の生理』は、翻案小説でありながらバタ臭さを殆ど匂わせない。表紙の図柄も野中に続く小径の絵で歌舞伎の書割りのように見え、『黄薔薇』初版本に於ける薔薇とリボンの表紙とは趣向が全く正反対である。こうした『松の操美人の生理』と比較することによって、『黄薔薇』が示す物語空間と言語空間のコンフリクトは、このテキストの個性として鮮烈に浮かび上がってくるのだ。

4. 翻案の思想

『黄薔薇』がこのようなコンフリクトを抱えて消化し切れないまま、あからさまにそれをさらけ出してしまった原因を究明するには、このテキストがどういった享受層に向かって開かれていたのかを認識しておく必要がある。

『黄薔薇』が刊行された明治20年前後は、円朝は創作上では寡作の年代だったが、その一方、言文一致運動を促す契機になった速記本『怪談牡丹灯籠』が東京稗史出版社から刊行された明治17年から引き続いて、明治18年に同じく速記本として『塩原多助一代記』が速記法研究会から出版され驚異的な売れ行きを示すという、一連の大きな文体変動の核心として注目を一身に浴びた時期でもあった。『黄薔薇』は、速記本としての円朝作品が近代文体の模範として見なされてい

た時期に刊行されたテキストであり、従ってその文体を構成する言語上の近代性について敏感にならざるを得ない。

しかし、円朝の速記本に近代文体の方向性を認め、そこに価値を具体的に見出したのは、周知のように坪内逍遙等を始めとする知識人達であり、彼等はそれまで落語としての円朝を楽しんできた以来の一般享受層からしてみれば、ほんの一握りの人々でしかないと言えよう。安政6年、円朝初めての大入りとなった大道具・鳴り物の芝居噺『おみよ新助』以来の、娯楽を追求して止まない広い享受層が、芸人としての円朝の生活の支えであったことは見逃せない事実である。

明治2年に布告された市中寄席取締に関する布告(註7)を受ける形で、明治5年円朝は鳴り物入りの芝居噺から素噺に転向し、明治という新しい時代に於ける噺のあり方を模索する過程で、明治十年山岡鉄舟を知って後、明治新政府の要人達とつきあうようになる。円朝はそのつきあいを通して〈近代〉という西洋文明受容の先取精神に直に触れ、そこからいわゆる江戸の芸人から明治の文化人としての自意識を高めていく方向を取ることになる。しかし、一方では彼の相手とする聴衆は、彼が落語家である限り彼を文化人ならぬ芸人と見なす従来からの最下層をも当然伴うわけであり、それは明治五年の学制頒布による識字層の拡大によって、速記本刊行というメディア変革さえ吸収してしまう厚い層だった。『黄薔薇』のテキストに現れる物語空間と言語空間のコンフリクトは、こうした享受層の二分化に直に対峙した、明治の落語家としての円朝の自意識が必然的に生み出したテキスト構造であろう。

そのように見れば、お吉の扱う麻酔薬がなぜクロロホルムでなければならず、モルヒネという選択肢が選ばれなかったかについて、一つの仮定が成り立つ(註8)。というのも、円朝の妻お幸は、円朝に縁付く以前沢村田之助の内縁の妻であった柳橋の芸者で、明治2年の二人の結婚は巷でかなり評判になっているからである。円朝はその経緯を利用したのかもしれない。田之助は近世庶民の最も大きな娯楽であった歌舞伎の女形である。その田之助によって知名度を高められたクロロホルムは、いわばそのコノテーションに田之助が体現する歌舞伎の世界観／近世の話型を含んでいるのである。円朝は、このクロロホルムのコノテーションに、二分化した享受層を統合する可能性を賭けたのかもしれないのだ。田之助とヘボンの話が、草双紙から引き続いた合巻に度々採り上げられていたという先行事実も、円朝の創作意識の念頭にはあったに違いない。

ところで、この発話主体によって意識された二分化する享受層という観点は、明治六年に森有礼の提唱で始まる英語の国語化論で既に言及されていた問題でもある。周知のように、森有礼は著書『Education in Japan』(明治6)の序文で、日

(註7)「市中寄席ノ儀ハ、爾來軍書講談昔咄等ニ限り、淨瑠璃人形ヲ取交ゼ相催シ候者、操芝居ニ限り候儀ニ有之候処、追々猥ニ相成リ、男女打交リ音曲物真似等相催シ、又者歌舞伎同様ノ所作致候向キモ有之趣ニ相聞、以之外ニ候。以來右体不取締之寄場催シ候者等有之候者、取糺シ候上嚴重之咎可申付間々、心得違之儀無之様可致事。」

(明治2・10・5)
但し、右の布告は明治五年に出されたという説もある。

(註8)これはあくまでも原典不明の現状に依拠する仮定である。

本が西洋文明を取得するためには英語を国語に定めるべきだという論を提唱したが、それに対抗したのが馬場辰猪『Elementary Grammer of the Japanese,with,Easy Progressive Exercises』（明治6）の序文で、馬場は、英語を国語にすれば上流階級と下層階級で言語のみぞが生じ、英語がしゃべれない下層階級は国事から疎外されてしまうだろうという危惧を警告した。結果的には、森の英語採用論は却下され、日本は西洋文明の吸収に翻訳主義を選択して、今日まで続く未曾有の翻訳王国への道を歩み出すのだが、この馬場の『Elementary Grammer of the Japanese,with,Easy Progressive Exercises』は、『黄薔薇』が刊行された翌年明治21年に増補版が発行され、その版の序文では森有礼への反駁論の箇所は削除されている。丸山真男はこの点を指摘して、明治21年にはもう英語を国語にするなどということはありえなくなっていたから削除したと解説している（註9）が、即ち明治20年頃に翻訳主義が完全に日本に定着した証左であるということで、それはつまり上流階級と下層階級との言語の決定的な乖離・断絶を回避する方向に言語政策が尽力したということになる。そして、一見階級間のみぞを埋めると見られるこのような言語政策の意識下には、社会を上下階層の区分けで捉える認識が前提とされているのであり、それはこの時期の円朝の自意識とパラレルな位相として確実に在ったのである。

（註9）丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』（岩波新書 平成10・10）より「翻訳文化の到来」

ここで焦点化されるのは、翻訳ならぬ翻案の問題であろう。上下間構造で構築された社会認識の狭間に生きる者としての自意識を担った円朝のような発話主体／表現主体にとって、逐語訳を至上とし原文の意趣そのままの伝達に専念する翻訳の思想よりも、既存のコノテーションを自在に駆使する、いわば翻案の思想こそ創作のモチベーションを維持する拠り所だったのではあるまいか。『黄薔薇』が刊行された明治20年の10月には、「国民の友」誌上で森田思軒が「翻訳の心得」を発表するという同時代状況があるが、思軒の言語構造の差異への徹底的な拘りから、やがて二葉亭四迷に於ける原文の「神を取る道途」に脱却していく翻訳の思想は、言語空間と物語空間とのコンフリクト——そして、そのコンフリクトをこそ楽しむといったテキスト受容現象を引き起こすことはない。同時代状況としては寧ろ、『（角）双子／奇縁 二葉草』（明治20？）や『法廷の美人』（明治21）といった翻案探偵小説をものし、翻訳王と謳われた思軒よりも実質的に一時代を築き上げたと言える黒岩涙香の活動を比較検証するべきだろう。

中島河太郎によって、『黄薔薇』と黒岩涙香の翻案探偵小説とを結びつける文学史観は既に論じられている（註10）が、両者の結節点はバタ臭さというアトモスフィアを喚起する言語空間と物語空間との次元間^{レベル}のコンフリクトに見出すことが出来る。黒岩涙香は、単行本『法廷の美人』（明治22 薫志堂）前文で、翻案

（註10）中島河太郎『日本推理小説史 第一巻』（東京創元社 平成5・4）より「第三章 円朝と涙香」

という立場の解説を試みており、これが当時唯一の、翻訳に対峙する翻案論である。

...余は一たび讀みて胸中に記憶する處に従ひ自由に筆を執り自由に文字を駢べたればなり...斯く原文に合ざるは言ふ迄も無く趣向も又原趣向に合はず之を訳と云ふは極めて不当なれど訳に非ずと云はば亦剽窃の譏り模倣の嫌ひを免れず依て強て訳と云ふなり...不当と云は、云へ僭越と譏らば譏れ、余は翻訳者を以て自任する者にあらざるなり

従来、明治の翻訳文化は多々論じられてきたが、翻案小説を徹底的に考察する態度は不十分なままで今日に至っている。右の涙香の文章も、文学研究に於いて充分検討されたとは言えない。比較言語学の見地からも、翻案は翻訳より思想的に一段劣るといったような感覚で以て捉えられている。亀井俊介は「日本の近代と翻訳」(『近代日本の翻訳文化』中央公論社 平成6・1)で、黒岩涙香をちらりとかすめて次のように言う。

私はこの小文で、日本の「近代」ということにこだわってきたため、日本における翻訳の独特な地位や役割、その魅力やそれがかかえる問題について、ある種の枠の中での価値判断をしてきた傾きがあるようだ...じつのところ、文学についていえば、西洋種子^{だね}の「奇談」「怪談」を面白おかしく翻訳するというたぐいの努力も、日本の文化・文学を大いに豊かにしてきたと思う。大衆小説の翻訳では、黒岩涙香流の自由自在な日本化も、意義があったし、いまでもあるのではないかと思う。...

翻訳ではないが、翻訳文化の一部と見なしたいものに、翻案がある。つまり原作をとにもかくにもなぞらえる形で外国語に移そうとするよりも、むしろ換骨奪胎して作り直そうとするものである。日本の近代文学では、翻訳小説がひろまり出した頃から、ぞくぞくと試みられた。...

翻案の範囲はなかなか決めにくい。外国の作品からヒントを得たり、部分的に材料を得たりした作品まで翻案と呼ぶと、日本の近代小説の相当部分が翻案ということになる。

翻案の問題は、亀井俊介がかすめた程度よりはもっと大きな問題として、日本の近代文学・文化の根本に在ると思われる。一見、翻訳は言語空間に、翻案は物語空間に主に関わるようだが、涙香の翻案小説が探偵小説の先駆である事實は、

翻案にも確かに言語の問題が反映されていることを示すものだ。森有礼は『Education in Japan』の中で、「日本語のような貧弱で不確実な伝達手段」と言った。馬場辰猪はそれに駁して、「日本語は普通教育の基礎を教えるのに十分完全な言語」であり「(伝達の) 目的を達成するに十分な体系を備えている」(『Elementary Grammar of the Japanese, with Easy Progressive Exercises』) と主張した。そして、涙香の翻案した探偵小説とは、事件の状況を正確に伝達し且つ論理性を主眼とするテキスト構造を主張することによってジャンル形成を支えられているものなのである。確かに涙香の翻案小説は、推理小説氾濫の今日の見識から見ればディテクティブ・ストーリーというよりもサスペンス、スリラーといった感が強い。その感江戸川乱歩が活躍した大正・昭和初期にあっても既に指摘されていたことではある。しかしながら、自らの翻案小説を「文学に非ず報道なり」と断言し、『小説神髓』の掲げる人情写実の文学理念と対峙するものとして明確に打ち出した(註11)涙香のテキストは、万朝報紙面に同時掲載された事件雑報記事の報告文体と感応し合って、伝達・論理性の言語空間を完成し得てはいないにしても、志向しようとしている。というよりも、志向しようとするその過程に生じるコンフリクトそのものを、バタ臭さという趣向にすり替えて楽しもうとしていると見るべきか。例えば、翻案宣言のなされた序文を掲げ持つ『法廷の美人』という作品は、全く言語空間の次元では破綻している。主人公「お璃巴^{りは}」はまだ翻訳的な名とはいえ、「卓三^{たくぞう}」「平徳^{ひらのり}」といった全くの和名の人物が、「倫敦^{ろんどん}」「デホン街」等といったイギリスの都市を当然の如く闊歩しているのだ。しかし、その言語空間の破綻が、コノテーションの自在さによって隠蔽され、異国の物語——それは異質なイデオロギーとの出会いが潜在化されたものである——に対する本能的な忌避感・警戒心を持つ読者を、バタ臭さという趣向でテキストを難なく面白がる享受層へと逸らせていくのである。クロロホルムやモルヒネといった正式な外来語ではなく魔薬といった表記を散見させる涙香のテキストは、円朝の『黄薔薇』よりも大胆な技巧でコンフリクトを赤裸々に露見させることで、却ってコノテーションの展開の妙という趣向にそれをシフトさせ、新しい物語享受の態勢を巷に潜在化することに貢献したと言えよう。

(註11) 黒岩涙香「探偵小説譚に就て」(万朝報 明治26・5・11)

ともかくも、明治20年以降、森有礼の英語採用論を抑え込んだ馬場辰猪の著書の増補版刊行と、円朝の『黄薔薇』刊行及びその好評と、黒岩涙香の翻案探偵小説流行とは、同時代言語状況を示す三つの位相のサンプルとして捉え得るのである。

5. おわりに

結句、『黄薔薇』の示す物語空間と言語空間とのコンフリクトとは、決して近世以来の常套の話型に単なる風俗用語を織り込んだという否定的消極的な面のみではなく、むしろテキストに生産性を与える面も有していたのではなかろうか。客観的に見れば、円朝の自意識にいかほど煩悶があったにしろなかったにしろ、注目すべきは、毒婦譚或いは人情話の常套の話型が、異質の言語の介入を許容しつつ進行し得る新たな方向性を示した（註12）ことにある。換言すれば、いわば物語の存続を可能にする要因たらんとして、この言語空間のコンフリクトは選択され志向されたのである。

例えば、より顕著で有名な『真景累ヶ淵』冒頭のあの幽霊の定義をここで持ち出すことも可能であろう。『真景累ヶ淵』は、安政六年に円朝が自作した『累ヶ淵後日の怪談』をもとにしたもので、速記本が刊行されたのは『黄薔薇』発兌の翌年明治21年頃とされている。原案の『累ヶ淵後日の怪談』が残されていないので比較検討は不可能だが、幽霊を当時の流行語であった神経として解説するその言語感覚は、『黄薔薇』よりは巧みにコンフリクト隠蔽の洗練された技術を示している。しかし、やはりどのようにしても隠蔽が完全になされるわけではなく、コンフリクトは必然的にテキスト上に現れ、飛鳥井雅道に「彼はお化けの世界に本当は生きたかったのだ、とわたしは思う」（註13）と言わせ、矢野誠一には「多少の化粧なおし」（註14）と評させてしまうような、近世物語空間へ単線的に向かう読みの指針を与えてしまう。二者の意見はもっともである。とはいえ、幽霊と神経という、それまで異質の言語空間に属していた語を結びつけることによって、そこには新たなコノテーションが開拓され、結果的に元は草双紙であった累の物語は再生産の形で明治期に於ける存続が保たれることになったとも言える。

重要なのは、それが物語の再生産^{リ・プロダクション}とは言えても、複製とは言えない類のものであることだろう。コノテーションの開拓には、発話主体／表現主体のテキスト意識が能動的に働くからである。テキスト意識とは、先行テキスト（群）と自身の作品との差異について自己言及せざるを得ない創作自意識の意に他ならない。そしてそこに、テキスト享受層の物語存続への欲望が敏感に反応せられた時に生じるのが、〈通俗〉という近代文学史上等閑に附されてきた大きな問題なのである。私に関心を持つ〈通俗〉とは、このような創作側・享受側双方のテキスト意識のせめぎ合いの場に於いて、敢えて選択された切実な創作上の問題を指すものであることを、ここで断っておきたい。

明治20年前後は、先行テキスト（群）と自身の作品との関係が、欧米の作品群とその翻案小説という構造に容易くだぶる希有な時代であった。また、テクス

（註12）前述したように、物語の転部がクロロホルムという語の導入によって促されているということが大切なのである。

（註13）飛鳥井雅道『『開化』をつきぬける円朝』（『三遊亭円朝全集 7』月報 角川書店 昭和50）

（註14）矢野誠一『三遊亭圓朝の明治』（文春新書 平成11・7）より「五 幽霊との決別」

ト享受層が言語空間上二分化され得る可能性をやり過ぎつつ、その反動として上下階級構造意識を暗黙の前提として社会が受容した時期でもあった。明治の落語家としての強い自意識を担っていた三遊亭円朝による翻案小説『黄薔薇』は、その際生じた言語空間のコンフリクトがやがて〈通俗〉という蔑称で以て、創作側からも享受側からも隠蔽されていく端緒をかいま見させてくれるテキストなのである。

(了)



図1 『澤村田之助曙草紙』(明治13・7～10)
『明治文学全集』筑摩書房より

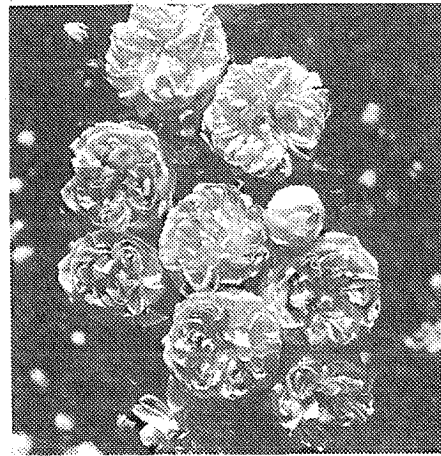


図2 Soleil D'Or (鈴木省三『ばら花図鑑』平成7・4 小学館)

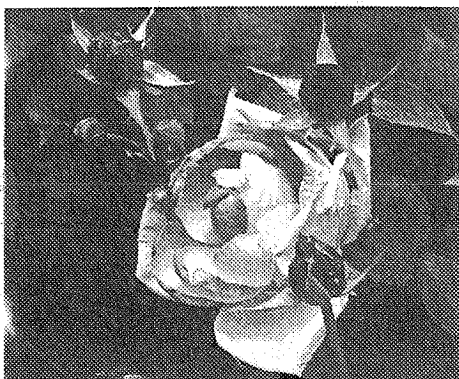


図3 La France (『ばら花図鑑』)



図4 『黄薔薇』初版本表紙
(東京大学附属図書館蔵)



図6『黄蔷薇』役割番付（早稲田大学演劇博物館蔵）



図5 Rosa banksiae leuea （『ばら花図鑑』）



図7『黄蔷薇』改版本
（国立国会図書館蔵）